から、遂に寓目の機會を得なかつた。然るに突然の事情の爲に余はこの旅行を中止したので、更めて同氏からこれを借覽し、こゝに簡單なる、補正を施すことを得るに至つたのは幸とする所である。

本章イに述べたやうにラウファー氏は Skizze der mongolischen Literatur の中に、ボゴミルスク縣出土の鑄鐵の牌のあることを述べて居るが、その形については merkwürdiges Stück と書いてあるのみで、その以上に及んでゐない。それで余は深くもその點に注意を拂はないで止んだのである。然るにラウファー氏もそこに註記してゐる一八八一年刊行の露西亞の學士院報告（Записки Академій Наукъ）第三十九卷、一—一三頁に載せたポズドネーエフ氏の Объясненіе древней монгольской надписи на чугунной Дощечкѣ, Доставленной въ Императорскую Академію Наукъ Т. Пинокуровымъ と題した論文を見ると、この牌についての研究を試みた上に、牌面の寫眞をも附載してある。こゝに（口繪第六圖）として載せたのはそれである。圖について認められる通り、この牌は珍らしくも圓牌であつて、ポ氏が本文中に說明して居るところによると、大きさは約四寸に五寸五分に當つて居る。牌面の圓板の部に鍍銀の八思巴文字五行（本文イに載せたラウファー氏の譯文參照）を刻出し、圓板の上に接して蒂樣の飾板を附け、更にその頂きに圓環を取り附けたものである。飾板には可なり複雜な模樣が彫刻されてあることは認められるが、それが何の形であるかは、この圖版に依つては識別し難い。ポ氏のいふところに依ると、この模樣は不鮮明であるが、支那帝國の紋章である龍を刻したものと思はれるとのことである。こゝに海青圓牌について論述しながら、この圓牌に及ばなかつたことは、全く余の寡聞の致すところで、今更慙愧に堪へない。さてそれではこの圓牌は前に述べた中のどの牌に相當するものであらうか。牌面の模樣はこゝに述べたやうに判然とは認め難いが、ポ氏に據れば龍と見られるとのことで